

校長研修だより10

先生方に求める「努力」

2021・5・26 重枝 一郎

「努力は必ず報われる」という言葉をよく聞く。この“努力”が結果に結び付くという信念は、結果期待と呼ばれる。ところが、なかなか結果が出ないことは多々ある。そうすると、人はこの“努力”に対して様々な思いをもつと思う。例えば、「それでも努力を続けることが必ず結果に結び付く」「努力だけではどうしようもない自分の才能が影響する」「結果とは無関係に努力自体に意味がある」「努力は報われるかは問わずに好きだからしている」・・・

「楽しいから努力する」という言葉は、これまた教育の世界では「内発的動機付け」と言われる。私たちの授業においても、学習課題を直感的に楽しいものにする工夫を入れることはよく行われる。そして、それをきっかけとして自ら学ぶ意欲が高まるように仕向けていく（他律的→自律的）。自ら楽しめるように工夫することができないと、やはりそれは他律的ということになる。

しかし、“努力”を持続させていくには、「怒られるから」「友だちに負けたくない」「合格するため」「お小遣いをもらう」など外発的動機付けが影響することがあるのも否定できない。

そこで、内発的と外発的をミックスさせたような“努力観”として、「他人のために努力する」ということがあると思う。例えば、プロ野球選手のゴールデンスピリット賞というのを聞いたことがある。これは、プロ野球選手が自分の成績に応じて寄付活動をしているというものである（ピッチャーの奪三振の数に応じて子どもにランドセルを寄付する、ホームランの数でワクチンを寄付するなど）。つまり、自分の努力に社会的価値を付与することで、「自分が努力すれば、他者を幸せにできる」という考えで、努力を持続させていく方法と言える。

今、教育実習が行われている。実習生の“努力”する姿を見て、私自身の教育実習をふと思い出した。私は、小学校（附属福岡小）5週間、中学校（母校）2週間の実習を体験した。小学校での実習は、そのつらさから途中でいなくなる実習生もいた。私のグループも一人、突然いなくなった。突然なので、その人の理科の授業を私が引き受けた（ちなみに私は数学）。その時の私は、なぜかいつもよりもやる気がわいていた。おそらく、ピンチであること、他人のために努力する感覚が、やる気の源になっていた。いつも以上に努力できた自分がいた。中学校での実習は、相変わらず母校のサッカー部は学校の荒れの原因のような存在で、先生たちに多大なる迷惑をかけていた。ところが、実習生ではあるが、サッカー部の先輩の「重枝さん」ということで、日頃、教科書も開かない生徒が、ノートをとっている。他の授業もきちんと受けるようにサッカー部の後輩たちに話した。たぶん義理と人情の世界と思うが、後輩たちは少し変化し、他の先生から感謝された。

どちらも、他者から良い反応をもらったことが、教員になろうと思ったきっかけかもしれない（それまで教師になるなんて真剣に考えてなかった。また、学生時分は教師からほめられたこともなかった）。このように他者に関連した要因、つまり、「他者から評価されたり承認されたりすること」「他者から受ける支援や期待」「共に努力する仲間が存在」「他者との良好な関係」「他者の役に立っている行為」。これらの“努力観”が、私が先生方に求める“努力”である。